

村上春樹『スプートニクの恋人』論

——こちら／あちらの問題を軸として——

杉山 裕 紀

序 『スプートニクの恋人』 研究の現在と問題の所在

『スプートニクの恋人』（講談社、書き下ろし）は一九九九年四月に発表された長編小説であるが、二〇一六年八月現在、先行研究は他の村上春樹長編に比して量的に乏しく、「村上春樹の「後退」」⁽¹⁾、「失敗作として遇されて（評されて）いることは、必ずしも不当なことではない」⁽²⁾ などと不評を買っており、これまで高く評価されてきたとはいえない作品である。村上他作品と比較して「成功」や「失敗」あるいは「進歩」や「後退」を論じるのではなく、作品群から一旦切り離して読み、その価値を照らし出すことが求められている。

研究史においてもっとも活発に議論がなされてきた問題を挙げるとすれば、(1)作品結末の解釈(2)「あちら側」の定義、の二点であったといえる。

(1)は作品結末、失踪したすみれから〈ほく〉のもとにかかってくる電話が現実であるのかそれとも夢であるのかという解釈をめぐる問題である。先行研究では結末が現実／夢のどちらかであることを前提と

して論じる研究、換言すれば十分な根拠を示さずに結末を現実／夢のどちらかで解釈しているものが多いといえる。(1)の問題に決着をつける強力な論は未だ提示されていないのが現状である。

(2)について、本作品は「こちら側」と「あちら側」という「ふたつの異なった世界」(13)を軸として物語が展開する。「あちら側」はこれまでに「虚構(の)世界」(大竹⁽³⁾、影山⁽⁴⁾)「超越的な世界」(加藤⁽⁵⁾、宇佐美⁽⁶⁾)「ユートピア」(徐⁽⁷⁾) などとして定義されてきた。「あちら側」を定義する際に無視できないのは、すみれとミユウの共通点及び相違点である。なぜミユウは「半分」が「あちら側」に失われ、すみれは全身で「あちら側」へ失われたのか、研究史ではこの点は十分に問題視されてこなかったといえる。両者が芸術家(ピアニスト／小説家)となるために多くを犠牲にする人生を送ってきたという点は、看過することのできない共通点である。彼女たちには人生から排除してきた様々な可能性がある。この点を手がかりに、本稿では「あちら側」をあり得たかもしれない別様の現実であると定義する。したがって「あちら側」に失われるということは存在論的な問題を含

みこんだ現象であると考えられる。

本稿では「あちら側」とはどのような世界であり、こちら／あちらの「異なった世界」に留まる／消失するということがどのような存在論的意味をもつことであるのか、また現実／非現実が曖昧であると考えられる作品結末は、こちら／あちらという世界観に対する語り手のどのような姿勢の表れであるのかを明らかにしたい。

一 別様の現実としての「あちら側」

本作品において「あちら側」が最も濃密に表れたエピソードは、ミュウが二十五歳のとき経験した観覧車事件である。この事件をきっかけにミュウは「半分」になったのだという。

本章ではミュウがなぜドッベルゲンガーを幻視したのかを通して「あちら側」の定義を試みるとともに、ミュウが「半分」になった過程に含まれるアイデンティティ上の問題を明らかにする。

―― ドッベルゲンガーを誘発したもの

ドッベルゲンガーを幻視する以前にミュウが内部に抱えていた問題を指摘しておく。

ミュウの人物形成に大きく寄与した要素として、彼女がかつてピアニストを志していた点を見過ごすことはできないだろう。かつてのミュウの頭の中を占めていたのは「とにかく一流のピアニストになりたいという思い」（12）だけであった。

わたしがピアノのために犠牲にしてきたのはいろんなことなんかじゃない。あらゆることよ。わたしの成長過程に含まれたことすべて。（4）

ミュウはピアニストとなることに専心し、「一流のピアニスト」となるほかの選択肢、あり得た可能性をすべて排除してきた女性なのである。

観覧車事件を機にミュウは「二度と鍵盤に手を触れな」（12）くなる、すなわちピアニストとしての道を断念するのだが、それ以前より「遅かれ早かれ」ピアノを弾けなくなることが「薄々わかっていた」という。

「フランスに来て一年ばかりたった頃、不思議なことに気がついたの。つまりね、わたしより明らかにテクニクが劣っていて、わたしほど努力しない人たちが、わたしより深く聴衆の心を動かしているのよ。音楽コンクールに出ても、わたしは最後の段階でそういう人たちに打ちまかされた。最初のうち、それは何かの間違いだろうと思った。でも同じことが何度も繰り返された。そのことでわたしは苛立ったし、腹も立てた。そんなのって公正じゃないと思った。でもそのうちにわたしにも少しずつ見えてきた。わたしにはなにかが欠けているんだということがね。よくわからないけれど、なにか大事なものの。感動的な音楽を作り出すために必要な人としての深み、とでも言えばいいのかしら。（12）」

彼女の感じていた苛立たしき、腹立たしき、あるいはピアノリストとしての行き詰まりの感覚、閉塞感は、理想とする自己の姿と現実の自己の姿との不一致から生じたものであり、現実の自己存在に対する違和感だといえる。

ピアノリストとして他者から高く評価を受ける姿がミュウの理想とする自己である一方、現実の彼女は「わたしより明らかにテクニクが劣っていて、わたしほど努力をしない人たち」に「打ちまかされ」という屈辱を味わっていた。そしてフランスで過ごすうちに「感動的な音楽を作り出すために必要な人としての深み」が「欠けている」という欠落感を抱き始めた。彼女が「苛立たしき、腹も立てた」相手は、実のところミュウ自身だったのである。

同じくミュウの「それは何かの間違い」「そんなのって公正じゃない」といった感情は、聴衆をはじめとする他者に向けられた言葉であると同時に、自己に向けられた言葉でもある。それは「自分はこんなはずではない」というような、今・ここを生きる自己のあり方が「間違い」であるという思い、すなわち自己に対する違和感を指摘した言葉である。そしてこの違和感は、もつと自分はある、あもあも得るのではない、という別様の自己への羨望と表裏一体の関係にある。

このように考えると、ミュウは人生のある時点より常に「出口」〔13〕を求めてきた人物であるといえる。「出口」とはピアノリストとしての行き詰まりからの「出口」、換言すれば「こんなはずではない」現実の自己存在から、別様の自己への「出口」である。別様の自己への羨望とはそれ自体、今・ここを生きる自己という閉塞からの「出口」

を求める意識にほかならない。

ミュウが観覧車事件を経験したのは、彼女がすみれと出会う十四年前のことである。ミュウは「スイスのフランス国境に近い小さな町」で「あまり好ましい印象を持」つことができないフェルディナンドという男からつきまとわれているように感じていた。

ある時ミュウは「気晴らしに」観覧車に乗り込む。しかし係員の老人がミュウを観覧車に乗せたことを忘れて立ち去ってしまう。

やがて観覧車は天空を通り越して、下降へと移る。でもほんの少し下降したところで観覧車は大きな音を立て唐突に停止する。

「中略」わたしはここに取り残されてしまったのだ。

彼女は半分だけ開いた窓から身を乗り出して、もう一度下を見おろす。ひどく高いところに自分がいることがわかる。彼女は大声で叫んでみようと思う。助けを呼ぼうと思う。でもそれが誰の耳にも届かないであろうことは、叫ぶ前から既にわかっている。

〔12〕

ミュウの乗ったゴンドラは観覧車の軌道の頂点付近の「ひどく高いところ」で停止し、彼女はその閉鎖空間に「取り残され」る。

ミュウがゴンドラに取り残されたことは、彼女のピアノリストとしての行き詰まりや可能性のなさ、及びそのことによる閉塞感を象徴する出来事であったと考えられる。この時「出口」を求める気持ちが無制限まで高まったのではないだろうか。そのような時現れるものこそ、「あ

ちら側」の光景やそこへ通じる「出口」だったのである。

ミュウは双眼鏡で自分の部屋を覗き見、ドッペルゲンガーすなわち「あちら側」の「もう一人のわたし」がフェルディナンドに服を脱がされ、彼との「肉欲の時間を楽しんでいる」様子を直視する。「こちら側」のミュウはそれに対し「気分が悪くなった」「吐き気がした」と不快感を示す。

ミュウは、その光景を例えば夢とは思えない。ミュウが強い不快感を示しているのは、その光景を非現実のものとして受け止めることができなかったためである。「あちら側」とは非現実ではなく、もう一つの現実なのである。

「ずいぶん自由にセックスを楽しんだ時期もあった」ミュウにとつて「あちら側」のミュウがフェルディナンドと寝ている光景そのものは決して起こりえなかった出来事、非現実的な光景だとは言えない。「あちら側」のミュウはミュウがそうであったかもしれないもう一つの姿なのである。

ここから、「あちら側」の世界とは、あり得たかもしれない別様の現実であると捉えることができる。そして「あちら側」を生きる「もう一人のわたし」とは、そのような別様の現実を生きる、あり得たかもしれない別様の自己である。

「一流のピアニスト」となるべく「あらゆること」を犠牲とする生き方を選択したミュウの人生に、様々な取りこぼした可能性や、選択されなかった生き方があるであろうことは想像に難くない。ピアニストをひたすらに目指す生き方が、かえってピアニストになるために必

要な「なにか大事なものの」の欠落をもたらしたのである。このジレンマにより、ミュウは彼女が歩んできたこれまでの人生、選択の連続を悔恨することになったのではないか。今・ここにいる自己を形成してきた人生の軌跡に対する否定的な感情が、ミュウに別様の自己への羨望を抱かせたに相違ない。別様の自己への羨望、つまり「出口」の希求が高まったとき、「あちら側」に通じる「出口」が開かれ、その光景を目にしてしまったと考えられる。

以上のように、今・ここを生きる自己存在に対する違和感、裏返せばあり得たかもしれない別様の自己への羨望、「出口」を希求する意識がミュウのドッペルゲンガー幻視体験を導いたのであり、また「もう一人の」ミュウがいる「あちら側」とは別様の現実である。

――「半分」になるといふことの意味

幻視によってミュウは「黒い髪と、わたしの性欲と生理と排卵と、そしておそらくは生きるための意志」を失い「半分」になったという。「こちら側」と「あちら側」の間で「引き裂かれてしまった」とはどのように意味づけられるだろうか。

「わたしはこちら側に残っている。でももう一人のわたしは、あるいは半分のわたしは、あちら側に移って行ってしまった。わたしの黒い髪と、わたしの性欲と生理と排卵と、そしておそらくは生きるための意志のようなものを持ったままね。そしてその残りの半分が、ここにいるわたしなの。『中略』わたしたちはいつか

どこかで再会して、またひとつに融合することがあるかもしれない。しかしそこにはとても大きな問題がひとつ残っている。それは、鏡のどちらの側のイメージが、わたしという人間の本当の姿なのか、わたしにはもうそれが判断できなくなってしまうという事なの。たとえば本当のわたしとは、フェルディナンドを受け入れているわたしなのか、それともフェルディナンドを嫌悪しているわたしなのか。(12)

ミュウはそれまで別様の自己への羨望を抱いていた。従って「あちら側」への「出口」が開かれミュウが見るドッベルゲンガーとは、本来ならば彼女がそうありたいと願っていた姿、例えばピアニストとして成功するミュウ自身でなければならぬはずであり、また現実の自己への違和感を解消しようとすれば、ミュウは「あちら側」への「出口」を通り抜け、「半分」ではなく全身の別様の自己として生きることを選ぶはずであった。

ところがミュウが目にしたのは、「自分が汚されていることに気がつきも」せず性欲に身をゆだねる自己の姿であり、彼女はその姿を羨望するどころか「おぞましいこと」として否定する。「こちら側」で閉塞を感じるミュウにとって、自己存在への違和感を解消するための「出口」が開かれたはずであったが、「出口」の先の「あちら側」もまた彼女の望まぬ世界だったのである。

しかし「あちら側」を拒否したにも関わらず、ミュウは「こちら側」に完全に留まることはできず、「半分」が「あちら側」に失われてし

まう。それは彼女に「こちら側」の自己に対する強い肯定感がなかったためである。「もう一人の」ミュウの否定は、かつて「ずいぶん自由にセックスを楽しんだ時期もあった」彼女自身の性的欲求を否定することでもある。先にも述べたように、ミュウがドッベルゲンガーに強い不快感を示しているのは、その光景を非現実のものとして受け止めることができなかったためである。ミュウはドッベルゲンガーを目撃した際、それが自己内部にある性的欲求の露出でもあると捉えたのではないだろうか。「あちら側」の自己を介して、「こちら側」の自己がかつて繰り返した行為が「おぞましいこと」に見えてしまう。これはミュウにとっては大きな精神的打撃であった。

常識的に考えれば、ドッベルゲンガーの幻視という精神的打撃によってミュウは白髪になり、生殖機能やピアニストとして「生きるための意志」を失ったと考えるべきである。しかし「12」でミュウが「二人に引き裂かれ」たと述べていること、そして何より「何かが奪い去られたというのではないのよ」と語っていることから考えれば、ここで重要なのは彼女が「黒い髪と、わたしの性欲と生理と排卵と、そしておそらくは生きるための意志」そのものを失ったということではない。

ミュウが「決定的に引き裂」いたもの、それは自己の在り処、居場所ではないだろうか。それはアイデンティティと言い換えてもよい。ミュウは「あちら側」の彼女を否定、拒否したことで、同時に「こちら側」の自己をも否定してしまっている。別様の自己に羨望を持ちながらも「あちら側」に移行しきれず、なおかつ「こちら側」の自分自

身までも否定してしまうミュウは、「あちら側」と「こちら側」の間で自己の在り処を「半分」に「引き裂かれて」いるというにふさわしい。「半分」に引き裂かれたとは、彼女の「こちら側」と「あちら側」の生き方のいずれをも選ぶことが出来ない分裂したアイデンティティの象徴である。

ところで、ミュウが「半分」を失った過程に含まれる問題は、「こちら側」で自己に対し違和感を抱えていた者の「出口」に対する欲求が頂点に達した際に「あちら側」への「出口」を提示された場合、どちらの世界を選択するかという、アイデンティティに関わる問題であったといえよう。次章では〈ぼく〉とすみれがそれぞれこの問いにどのような答えを出したのかを見ていく。

二 この私の根拠としての「こちら側」

前章ではミュウが「出口」を希求していた点を指摘したが、ミュウのみならず、すみれや〈ぼく〉もそれぞれ「出口」のなさを味わって生きている。

いざ机に向かって文章にしてみると、何か大事なものが失われてしまっているのがわかる。水晶は結晶することなく、石ころのままで終わってしまう。わたしはどこにも行けない。（「1」）

この女性（引用者注・ミュウ）はすみれを愛している。しかし性欲を感じることはできない。すみれはこの女性を愛し、しかも性欲を感じている。ぼくはすみれを愛し、性欲を感じている。すみれはぼくを好きではあるけれど、愛してはいないし、性欲を感じることができない。ぼくは別の匿名の女性に性欲を感じることができない。しかし愛してはいない。「中略」すべてのものごととはそこで行きどまりになっていて、誰もどこにも行けない。選ぶべき選択肢がない。（「10」）

本章では、閉塞を感じながら「こちら側」と「あちら側」の世界をそれぞれ選び取った〈ぼく〉とすみれに着目し、「あちら側」へ消失するということ、「こちら側」に留まることがどのように意味づけられるのかを明らかにしたい。

二― すみれ——「あちら側」の選択

ミュウがピアニストとなるために「あらゆること」を犠牲にしたように、すみれも「この世界に人生の選択肢がどれほど数多く存在しようとも、小説家になる以外に自分の進むべき道はない」（「1」）と考え、小説家以外の選択肢を捨てながら生きてきた女性である。すみれは大学を「こんなところにいたって時間のむだだ」と考え退学し、「生まれてからともに働いた経験がただの一度もないし、電話の受け答えもろくすつぽできない」など、社会性を欠いたまま小説家を志す人生を歩む。

しかし「実際にはすみれは、始めと終わりのある作品をひとつとして完成させることができなかった」。

いざ机に向かって文章にしてみると、何か大事なものが失われてしまっているのがわかる。水晶は結晶することなく、石ころのままで終わってしまう。わたしはどこにも行けない。「中略」わたしにはもともと何か欠けているのかもしれない。小説家になるために持っていないくちやいけない、何かすごく大事なものが（1）

引用部において、すみれは小説を思い通りの形で執筆することができず、「わたしはどこにも行けない」と感じているが、これは一種の閉塞感の表れとみることができる。

また、すみれはミユウが抱いていたのと全く同じ種類の欠落感を覚えている。ミユウは、「わたしにはなにかが欠けているんだということ」がね。よくわからないけれど、なにか大事なものの。感動的な音楽を作り出すために必要な人としての深み、とでも言えばいいのかしら」と欠落感を吐露していたが、すみれの「わたしにはもともと何か欠けているのかもしれない。小説家になるために持っていないくちやいけない、何かすごく大事なものが」という言葉はそれと見事に重なり合う。すみれの二歳年上の友人として、定期的に彼女の書いた原稿を読んできた（ぼく）は、すみれの発言やこれまでのすみれの原稿をおそらくは踏まえたうえで、次のような助言を施す。

骨をいっぱい集めてきてどんな立派な門を作っても、それだけでは生きた小説にはならない。物語というのはある意味では、この世のものではないんだ。本当の物語にはこっち側とあっち側を結びつけるための、呪術的な洗礼が必要とされる」

「中略」
「君に必要なのはおそらく時間と経験なんだ。ぼくはそう思う」（1）

自己に「小説家になるために持っていないくちやいけない、何かすごく大事なものが」が欠けていると考えるすみれに、（ぼく）は二点の助言を施す。まずすみれの小説を「生きた小説」にするために必要なのは「こっち側とあっち側を結びつけるための、呪術的な洗礼」であるということ。次に、すみれには「時間と経験」が必要であることだ。

ミユウ同様ただ一つの目的に向かって生きてきたすみれの人生には、「むだ」なこととして排除された現実が、多分にあることが容易に想像される。（ぼく）がすみれに「時間と経験」が必要だと助言するのは、彼女には欠落させた経験が多々あることを（ぼく）が知っていたためであろう。ここで、ミユウの場合同様、「むだ」なこととして排除された現実や自己が存在する世界が「あちら側」であると考えられる。（ぼく）は、すみれが「あちら側」に排除してきた、多様な経験を積んでいたかもしれないすみれの姿を、「こちら側」のすみれに象徴的に付与することが必要だと考え、「こちら側」と「あちら側」を結ぶための「呪術的な洗礼」が必要だと助言したのではないだろう

か。排除してしまった現実を回復すること、すなわち人生を再度やり直すことはできないとしても、今後小説家修行に限らず多様な経験を積むことはできる。「時間と経験」を積み人間としての幅を厚くすることが、「生きた小説」を書く上で大切だという助言なのである。

とはいえ、あくまで〈ぼく〉の助言は、「こっち側とあっち側を結びつけ」よというものである。その言葉が意図するところは、「こちら側」にいながらにして「あちら側」に失ってしまった経験を自己に付与すべきだ、というものだったはずであり、すみれに「あちら側」へ行くこと、すなわち「あちら側」のすみれになることを促すものではない。

すみれは〈ぼく〉の助言をきっかけに強く「あちら側」の世界を意識し、欲望するようになる。そして「あちら側」を望んでいたすみれがその世界に接近する契機となったのが、十七歳年上のミュウとの出会であった。すみれはミュウに恋をするが、その恋によって自己が「これまで一度も目にしたこともないような特別な世界」(「1」)に流されていく予感を抱く。常識の範疇で捉えれば、これはすみれがミュウへの恋を通してこれまで経験したことのない物事に触れる予感だと解釈されるだろうが、その後のすみれに訪れた展開を踏まえれば、「特別な世界」とはすみれ自身意識していないにせよ、「あちら側」のことを指すと捉えるのが妥当であろう。すみれが小説家になるために必要な「あちら側」、これまで排除してきた経験の世界への回路がミュウとの出会いによって開かれることが予想される。

ミュウの会社で秘書として働くことになったすみれは、ミュウの

ヨーロッパ出張に同行し、たどり着いたギリシャの島でミュウに肉体的関係を求める。しかしミュウは十四年前の事件を機に「この世界の誰とも身体を交わらせることができない」(「9」)ため、すみれの気持ちに応えることができない。

ミュウに「この世界の誰とも身体を交わらせることができない」と告げられたすみれは「堰が切れたみたいに泣いていた」。すみれがミュウに拒絶された際に感じたのは、「こちら側」においてはどのようにしても彼女との関係を発展させることができないという限界や「行きどまり」の感覚¹¹「出口」のなさだった。そこで「あちら側」の生殖機能を持つミュウを、そしてそのようなミュウがいる世界である「あちら側」をすみれは求めた。ミュウへの恋が挫折したことで「出口」の希求が極限まで高まり、十四年前のミュウの時と同じく、すみれの前に「あちら側」への「出口」が開かれたのである。

そしてすみれは「あちら側」へ消えてしまう。ミュウの要請を受けて現地へ向かった語り手〈ぼく〉は、すみれが残した文書を手掛かりに、「すみれはあちら側に行った」(「13」)という「ひとつの仮説をたててみる」。

すみれはどこかにうまく出口をみつけたのだ、ぼくは単純にそう仮定してみる。「中略」すみれはどこかにそのドアを見つけ、手をのばしてノブをまわし、そのままあっさりと外に出ていったのだ――こちら側から、あちら側に。(「13」)

〈ぼく〉はすみれが「出口」を通じて「こちら側から、あちら側に」「出ていった」と仮定する。〈ぼく〉が言い表しているように、すみれが通過したのはまさしく「こちら側」の閉塞から逃れられるような別様の現実Ⅱ「あちら側」へと抜ける「出口」であつたと考えられる。引用箇所で〈ぼく〉はすみれが「どこかにそのドアを見つけ、手をのばしてノブをまわし、そのままあっさりと外に出ていった」のだと推測している。〈ぼく〉の推測によればすみれは「ノブをまわす」ように、自発的に「あちら側」への移行を遂げたのだ。

すみれがミュウと異なっているのは、彼女が「こちら側」から完全に姿を消してしまつた点である。

ミュウが「半分」になつてしまつたのは、彼女が性的な快楽に身をゆだねる「あちら側」の自己像を否定してしまつたためであつた。「こちら側」の自己のあり様と「あちら側」の自己のあり様のいずれをも肯定・選択できないミュウは、どちらの世界においても完全な自己の居場所をもちえない。したがつて彼女は「こちら側」と「あちら側」の間で存在を「半分」に分割させてしまつたのである。

そうしたミュウの態度に対し、すみれには「こちら側」に留まる理由はなかつたといえる。すみれは「こちら側」では小説を完成させることができないうえ、ミュウへの求愛も失敗した。また〈ぼく〉を愛しているわけでもない。一方「あちら側」へ引き込む要素は多々あつた。例えばミュウの観覧車事件を聞いていたすみれは、「あちら側」に行けばミュウとの恋が遂げられると考えたはずである。そのようなすみれは「あちら側」への誘いに素直に応じ、全身で「あちら側」へ

消えたのではないだろうか。

ところですみれは「あちら側」に消失したが、別様の現実に移行した場合、その自己は果たして「こちら側」にいた自己と同じ存在であるといえるのだろうか。「あちら側」を別様の現実と定義する以上、すみれは「あちら側」へ移行することにより、彼女が意図するしないに関わらずこれまで自身が歩んできた人生の足取りを修正し、過去に行なつた選択を再度やり直したといえる。そのように別様の現実に移行した自己とは、「こちら側」にいた自己の延長なのだろうか。それとも「あちら側」を生き続けてきた自己そのものになること、すなわち別人格となることなのだろうか。次節では、別様の現実を生きる自己は果たして自己であるといえるのかという問題に対する〈ぼく〉の解答を指摘したい。

二二 〈ぼく〉——「こちら側」の選択

〈ぼく〉はすみれに「恋をしていた」（Ⅰ）。すみれと「恋人同士」になれたらどんなに素晴らしいことだろうとぼくはいつも考えた」（Ⅴ）が、すみれは「男性としてのぼくにほとんど（あるいはまったく）関心を抱いていない」。〈ぼく〉は理想の自己、つまりすみれと「恋人同士」である自己と、すみれに「関心を抱」かれていない現実の自己との懸隔を常に感じている。

ここから、〈ぼく〉もミュウやすみれほど強くはないにせよ、別様の自己への羨望を抱いていた人物だと考えられる。〈ぼく〉には別様の現実や自己を想像することで、現実から逃避する習癖がある。その

例として以下の箇所が挙げられる。

彼女たち（引用者注・〈ぼく〉が交際した女性たち）と身体を触れ合わせているあいだ、ぼくはよくすみれのことを考えた。というか、頭の片隅には多かれ少なかれいつもすみれの姿がちらついていた。ぼくが抱いているのはほんとうはすみれなのだと想像したりもした。（1）

ぼくはその手がぼくの硬いペニスに触れて、愛撫するところを思い浮かべた。そんなことを想像するまいと思っても、だめだった。思い浮かべないわけにはいかなかった。（5）

ぼくは遠くにあるどこかの町をよく想像したものだ。そこには一軒の家があって、その家にはぼくの本物の家族が住んでいた。小さくて質素だけれど、心が安らぐ家だった。そこではみんなが自然に心を通いあわせることができたし、感じたことをなんでもそのまま口にすることができた。夕方になると母親が台所でご飯を作る音が聞こえ、温かいおいしそうな匂いがした。それが本来のぼくがいるべき場所だった。ぼくはいつもその場所のことを頭の中で思い描き、その中に自分を溶けこませた。（15）

〈ぼく〉は想像の中にしかない現実Ⅱ非現実の中に「自分を溶けこませ」ることによって現実から逃れようとしている。

そのような〈ぼく〉が「あちら側」への接近を経験するのが「13」、消えたすみれを探しに訪れたギリシャの島でのことである。「すみれはあちら側に行った」と捉える〈ぼく〉は、無意識のうちにすみれがいるであろう「あちら側」を望んだのではないだろうか。

ぼくはうまく呼吸ができなくなるほどの、激しい悪寒に襲われた。よくわからないところで、誰かがぼくの細胞を並べ替え、誰かがぼくの意識の糸をほどいていた。考えている余裕はなかった。ぼくにできるのは、いつもの避難場所に急いで逃げこむことだった。ぼくは息を思いきり吸いこみ、そのまま意識の海の底に沈んだ。両手で重い水をかいて一気に下降し、そこにある大きな石に両腕でしがみついた。「中略」

時間が前後し、絡み合い、崩壊し、並べなおされた。世界は無限に拡がり、同時に限定されていた。いくつかの鮮明なイメージが——イメージだけが——彼ら自身の暗い回廊を音もなく通りすぎていった。くらげのように、浮遊する魂のように。しかしぼくはそれらには目をやらないようにしていた。ぼくが少しでもその姿を認めたそぶりを見れば、彼らはすぐにになにかの意味を帯び始めるに違いない。「中略」ぼくはかたく心を閉ざし、彼らの行列をやり過ごした。（13）

加藤典洋は引用箇所を「「あちら側」の世界に誘われるような経験」⁸⁾と位置付ける。また馬場重行は「ミュウが、観覧車の中で体

験するドッペルゲンガーに匹敵する「中略」(ぼく)の「命のすり替え」⁹であるとし、ミュウの観覧車事件との類似性を見出している。

両氏の指摘を併せて考えると、ここで「ぼく」が「目をやらないようにしていた」「いくつかの鮮明なイメージ」とは、「あちら側」の別様の現実、別様の自己のイメージ、ミュウが見たような自分のドッペルゲンガーの映像であったといえるのではないだろうか。

無意識のうちに「あちら側」を望んだことで「ぼく」は「出口」を開いてしまった。「ぼく」は「よくわからないところで、誰かがぼくの細胞を並べ替え、誰かがぼくの意識の糸をほどこしていた」という。馬場が「「命のすり替え」と表現したように、ここで「ぼく」が感じているのは「あちら側」の自己に引き寄せられ、別様の自己に自己が作り替えられていく感覚である。しかし「ぼく」は「あちら側」への移行を拒む。「あちら側」へ流され、「あちら側」の自己に作り替えられていく「奇妙な乖離の感覚」の中、「意識の海の底に沈」み「こちら側」に「両腕でしがみついた」。「いくつかの鮮明なイメージ」には「目をやらないようにしていた」。なぜならば「ぼくが少しでもその姿を認めたそぶりを見れば、彼らはすぐににかの意味を帯び始めるに違いない」ためだ。「意味」とは「鮮明なイメージ」が「あちら側」の「ぼく」であるという「意味」であろう。

「あちら側」からの誘惑に耐えた「ぼく」は、結局すみれを見つけ出すことができないまま帰国することになり、より一層「どこにも行けな」さを感じる。

ぼくが感じたのはたとえようもなく深い寂寥だった。気がつくといつの間にか、ぼくを取り囲んだ世界からいくつかの色が永遠に失われてしまっていた。「中略」ぼくをそこまで運んできたはずの乗り物は、いつの間にか姿を消してしまっていた。もうほかのどこにも行けない。そこでなんとか、自分の力で生きのびていくしかないのだ。(14)

「ぼく」はすみれが失われてしまった世界において袋小路に追い込まれている。「もうほかのどこにも行けない」と自己が新たな閉塞に追い込まれていることを強く自覚する。

「ぼく」がこのように強く閉塞を感じるのは、それが「こちら側」からすみれの存在そのものが失われただけではなく、ありえた未来までもが失われたことを自覚したためだろう。

すみれと会って話をしているとき、あるいは彼女の書いた文章を読んでいるとき、ぼくの意識は静かに拡大し、これまで見たことのない風景を目にすることができた。ぼくと彼女は自然に心をかさねあわせることができた。(14)

すみれの存在が失われてしまうと、ぼくの中にいろんなものが見えなくなっていることが判明した。「中略」ぼくとすみれとのあいだに起こったようなことは、その新しい世界ではもう起こらないだろう。ぼくにはそれがわかった。(14)

すみれが失われてしまった「こちら側」の世界では、「ぼくとすみれとのあいだに起こったようなことは」「もう起こらない」と〈ぼく〉は予感する。「ぼくとすみれとのあいだに起こったようなこと」とは、すみれ自身やすみれの文章と接することで「意識は静かに拡大し、これまで見たこともない風景を目にすること」、彼女と「自然に心をかさねあわせること」である。それはすみれに愛されないという苦痛を抱える〈ぼく〉にとつてたとえ一時的ではあれ、心が解放されるひと時であったに違いない。そうした出来事が起こる未来が失われた世界こそ、すみれが失われ、〈ぼく〉が残された「新しい世界」Ⅱ「こちら側」なのである。「新しい世界」という表現からは、すみれの消失を機に世界が大きく分岐したという〈ぼく〉の意識が表れている。

ギリシヤから帰国した〈ぼく〉は、そのように分岐していく世界のあり方、「こちら側」の世界から失われてしまっている未来、あるいは失われゆく未来があることを受け止める。

すべてのものごとはおそらく、どこか遠くの場所で前もってひそかに失われているのかもしれないとぼくは思った。少なくともかさなり合うひとつの姿として、それらは失われるべき静かな場所を持っているのだ。(16)

「こちら側」に存在する「すべてのものごと」は、別様の現実やそれに伴って生じる未来をあらかじめ失っているものである。

現在から未来へと続く道は、常に選択や決断により一方の現実・未

来を選択する作業の連続である。切り捨てられ排除された他方の未来は、「ひそかに失われている」といえるだろう。それらの他方の未来は「あちら側」へ失われてしまっているため、のちに悔んだところで回復することはできない。また今後も選択を繰り返すことで、新たに別様の現実が「失われる」。

別様の現実やそれに伴って生じたはずの未来が「失われている」ものの、翻せばもう取り戻すことができないものだと思える〈ぼく〉は、「こちら側」を徹底的に受容した人物であるということができるだろう。「あちら側」に失われてしまった現実や未来を羨望するのではなく、〈ぼく〉は「こちら側」の現実を受け止めようとしている。たとえそこすみれとともに生きる未来が失われていようとも、「あちら側」へ行くことで現実を再選択し生き直しを図るのではなく、「こちら側」の現実を生きようと決意している。

ところで別様の現実を生きる自己は果たして自己であるといえるのかという問題に、〈ぼく〉はどのような解を示したといえるだろうか。〈ぼく〉が「あちら側」を拒否し「こちら側」に留まるのは、「あちら側」からの誘惑を「乖離の感覚」(13)として〈ぼく〉が感じたことと無縁ではない。「乖離の感覚」とは「ぼくの手はすでにぼくの手ではなく、ぼくの足はすでにぼくの足ではなく」、「ぼくの本物の生命はどこかで眠りこんでしまっていて、顔のない誰かがそれをかばんにつめて、今まさに持ち去ろうとしているのだ」と感じたように、いわば自己が自己ではなくなる感覚、別の人間への作り替えのことである。「あちら側」への移行とは、単に身体が「あちら側」へ引き寄

せられるというのではなく、自己が自己から乖離していくこと、自己が自己ではなくなることを意味していたのではないだろうか。すなわち別様の現実に移行しその世界を生きる〈ぼく〉は〈ぼく〉ではない。

つまり少なくとも〈ぼく〉にとって〈ぼく〉とは「こちら側」を生きる自分自身のことではない。「こちら側」を形成してきたこれまでの人生のプロセスの中に、自己が自己である根拠、アイデンティティがある。今・ここに在る〈ぼく〉とは、こうでありえないものがあり、別の軌跡を描いて生きていては今・ここに在る〈ぼく〉は形成されえない。そのような意識が「乖離の感覚」として身体に表れたのではないだろうか。別様の現実を生きる自己は果たして自己であるといえるのか、という問いへの〈ぼく〉なりの解答がここには示されている。

「あちら側」からの誘惑に耐え「こちら側」を選択するという行為は、今・ここに在る自己を形成してきた人生の軌跡に自己が自己である根拠を見出し、こうでしかありえないものとして自己の現在を受け止める行為である。

この私は「こちら側」にしかない——この事実を〈ぼく〉は深く自覚している。

二―三 すみれからの電話——こちら／あちらを超えて

〈ぼく〉は「あちら側」への「出口」を選ばず、「こちら側」に留まる。とはいえ、「こちら側」からすみれという「かけがえのない存在」

〔14〕が失われてしまった事実に変わりはない。「こちら側」には「かけがえのない存在」が不在である、しかしこの私は「こちら側」にしかない——この板挟みの苦痛、新たに生じた閉塞から、〈ぼく〉はどのようにして解放されようとしているのだろうか。

本作品最大の謎は、「16」末にすみれからかかる電話が現実なのか夢なのかという点である。

すみれを失った〈ぼく〉は、その欠落を埋めるかのようにすみれが残した文書を「何度も何度も」〔16〕読み、「夢を見ること」が「ただひとつの正しい行為であるように思える。夢を見ること、夢の世界に生きること——すみれが書いていたように」と考えるようになる。「すみれが書いていたように」とは、文書1の次の箇所を指す。

夢を見続けること。夢の世界に入っていく、そのまま出てこないこと。そこで永遠に生きていくこと。

夢の中ではあなたはものを見分ける必要がない。ぜんぜん、ない。そもそもの最初からそこには境界線というものが存在しないからだ。だから夢の中では衝突はほとんど起こらないし、もし仮に起こってもそこには痛みはない。〔11〕

夢の中では「境界線」がないため、物事を見分ける必要はなく、「衝突はほとんど起こらない」というすみれの考えに基づき、〈ぼく〉は「夢を見ること」が「ただひとつの正しい行為」であると「16」の時点で認識している。

二―二で、〈ぼく〉には想像によって現実逃避する習慣があることを指摘したが、「16」においても「電話ボックスの中で煙草に火をつけ、プッシュ・ボタンでぼくの電話番号を押しているすみれの姿を想像する」と、すみれが（おそらくは〈ぼく〉に対し）電話を掛ける光景を想像していた。「想像」の直後に以下の箇所が続けられている。

でもあるとき電話のベルが鳴りだす。ぼくの目の前で本当に鳴りだしたのだ。それは現実の空気を震わせている。ぼくはすぐに受話器を取った。

「もしもし」

「ねえ帰ってきたのよ」とすみれは言った。とてもクールに。とてもリアルに。〔中略〕

「それはよかった」とぼくは言った。ぼくにはまだうまく信じられないのだ。彼女の声が聞こえることが。それが本当に起こったことが。

〔中略〕

「迎えに行くよ」

「そうしてくれるとうれしいわね。場所をよく調べて、もう一度電話する。どうせ今はちょっと小銭も足りないし。待っててね」

「君にとっても会いたかった」とぼくは言った。

「わたしもあなたにとっても会いたかった」と彼女は言った。「あなたと会わなくなってから、すごくよくわかったの。〔中略〕わたしにはあなたが本当に必要なんだって。あなたはわたし自身であ

り、わたしはあなた自身なんだって。〔中略〕」
「ここに迎えにきて」

そして唐突に電話が切れた。（16）

「夢を見ること」を「ただひとつの正しい行為」とし、さらにすみれが自らのもとに電話をかける姿を想像していた〈ぼく〉によって現実であると捉えられたすみれの電話が現実であるとはいい切れない。〈ぼく〉の生み出した夢や幻覚である可能性が高いのではないだろうか。特に引用箇所のすみれの台詞、「あなたはわたし自身であり、わたしはあなた自身」とは、この場面でのすみれが〈ぼく〉の生み出した幻想や幻覚であることを示唆するものであると考えられる。

仮にすみれからの電話が夢、幻覚とすれば、厳密にどのセンテンスから〈ぼく〉が現実を離れたのかは確定しがたいものの、「電話のベルが鳴りだ」した時点ではすでに〈ぼく〉は夢、幻覚の中に入っており、通話終了後その夢、幻覚から醒めたといえる。

このようにすみれからの電話については非現実の可能性が高い。しかし読み手がこの場面の解釈において混乱を来すのは、宇佐美が「現実」にはありえない〈現実〉の強調¹⁰⁾と述べるように、語り手〈ぼく〉がしきりに「現実」「リアル」「本当に」とそれが現実であることを繰り返し強調しているためである。

非現実の可能性が高い出来事を、あたかも己に言い聞かせるように現実として強調し、ついに〈ぼく〉は「どこにでも行くことができる」

とまで感じている。この心境はそれまで繰り返してきた、閉塞感を象徴する言葉である「どこにも行けない」とは正反対の心境であり、閉塞感から解放されている。

実際のところ、この場面を語り手としての〈ぼく〉は、すみれからの電話が現実であるのか夢であるのか、その真偽を追究しようとしていない。いずれにせよ自身にとって都合の良い解釈を施し、すみれが自身を「必要」とし、かつ帰還した「現実」を信じることで救われようとしている。あるいは現実であると自身に言い聞かせることでしか救われない。それ以前の場面で想像によって閉塞から逃れようとしていた〈ぼく〉の姿勢はここにきてもお一貫しているのである。

もちろん「こちら側」に残るという選択をした以上、「出口」のない閉塞の中をまた生き続けねばならなくなることは、当然〈ぼく〉も承知していたはずである。それを承知していたにも関わらず〈ぼく〉が「あちら側」への移行を拒み、あくまで「こちら側」に留まるのは、「あちら側」においてもまた救いがないと考えたためではないだろうか。すみれが向かった「あちら側」は「潤沢な性欲を持った」(14) ミュウがいる世界であり、すみれとミュウが「愛を交わすようになっているかもしれない」。「そこにははたしてぼくの居場所はあるだろうか?」という〈ぼく〉の懸念は当然であろう。「あちら側」はすみれがミュウとの愛を遂げられる世界であり、彼はすみれからの愛をますます期待できないのだ。すみれとの愛が「あちら側」でも遂げられそうにないと考えた〈ぼく〉は、「あちら側」にもまた救いがないと推測したのである。これは十四年前、ミュウが「あちら側」に「出口」

を求めているながらも、「あちら側」に救いはなかったこと、「あちら側」の自己が嫌悪すべき自己であったことと重なり合う。

したがって「こちら側」の現実においても「あちら側」の現実においても救われることのない〈ぼく〉は、こちら／あちらの二項対立を超えた非現実によつてしか救われることはないのであり、本作品結末において〈ぼく〉は実際に非現実¹⁾に救いを求めている。二―ではすみれが「こちら側」の閉塞から逃れるために「あちら側」の現実を選択したと指摘した。その一方で〈ぼく〉は非現実に見出すことで「こちら側」の閉塞から逃れたということが出来よう。すみれの帰還という極めて非現実的に描かれる本作品の結末は、〈ぼく〉が非現実によつてしか救われることがないほど、彼の直面した、かけがえない存在であるすみれの不在という現実が残酷であることを際立たせるものである。『あちら側』の別様の現実、別様の自己に対し羨望を抱くケースとは異なり、たとえ非現実にあこがれたところで自身が非現実へ移行することは当然ない。また〈ぼく〉は「こちら側」に留まったまま非現実²⁾に羨望を抱くため、この私³⁾のままで存在し続けられるのである。

ここで、〈ぼく〉が「あちら側」の現実を選択せず、また「こちら側」において現実逃避的な空想、非現実⁴⁾に身をゆだねたことは、作品の二項対立的な世界観に揺さぶりをかける行為であったということが出来る。『スプートニクの恋人』は「こちら側」と「あちら側」という「ふたつの異なった世界」を軸に物語が進行するが、非現実という三つ目の世界、いわば第三項が設定されることによりこちら／あちらの二項

対立が相対化され、解体されているのである。

さらに言えば、非現実に救いを求めることで二項対立を解体する（ぼく）の語りは、同時に現実／非現実の二項対立の解体にもなっている。すなわち、現実よりも非現実に価値を見出すことにより、現実が非現実に対し価値があるという一般的な優劣関係を覆しているのである。

ただし第三項たる非現実、想像の世界は、「こちら側」や「あちら側」と異なり、あくまで（ぼく）の中にしか存在しない世界であることに留意しなければならないだろう。「あちら側」はある時点で「こちら側」の現実と分岐した現実世界であり、「こちら側」と並行して存在する、ある時点の現実と地続きの世界である。一方、非現実世界は（ぼく）の想像力の限りどこまでも現実から遊離し、飛躍させることができる世界である。非現実世界はこの点で「あちら側」の現実世界とは大きく性質を異にする。

『スプートニクの恋人』結末のすみれの帰還とは、「こちら側」と「あちら側」という物語の主軸をなす二元論を崩し、かつ語り手（ぼく）が現実よりも非現実に救いを見出すという、二重の二項対立的価値観の転倒を意味する場面であるといえるだろう。

むすび

本稿では村上春樹長編作品『スプートニクの恋人』に表れた「こちら側」と「あちら側」という二項対立的な世界観に着目し、それらの世界が登場人物三人各々のアイデンティティのあり方と密接にかかわ

り合っている点を指摘するとともに、作品の主軸であったこちら／あちらの二項対立構造が最終的には解体されていることを明らかにした。

本作品における「あちら側」は別様の現実世界であり、この世界が設定されることにより「こちら側」を中心とするような世界観に揺さぶりがかけられ、「こちら側」という世界が相対的なものとなった。またこちら／あちらの現実に対し、非現実という第三の世界が設定されることにより、この二項対立構造はさらに相対化される。

本作品における二項対立解体の試みは、論中で指摘したこちら／あちら、現実／非現実に限られない。例えば「15」において（ぼく）の受け持ちの生徒である「にんじん」がスーパーマーケットで万引き事件を起こす。スーパーマーケットの警備員・中村は「にんじん」の行為を善か悪か、賞か罰かで裁こうとするのに対し、（ぼく）は「にんじん」の発している「メッセージ」を聞き取ることが肝要であると反論する。この場面についても善／悪、あるいは賞／罰の二項対立が「メッセージ」を聞くことという第三項によって解体されていると読むことができよう。こちら／あちら、現実／非現実のみならず、善／悪、賞／罰についても二項対立の解体が及んでいるのである。

また本稿では『スプートニクの恋人』における「あちら側」を別様の現実と定義したが、このような世界観は本作品に限定された特殊なものではない。のちの並行世界を舞台とする村上春樹『1Q84』（新潮社、二〇〇九年五月（BOOK1・BOOK2）、二〇一〇年四月（BOOK3））に引き継がれていくものであるといえるのではないだろうか。別様の

現実としての「あちら側」というモチーフ、およびそのモチーフの連続は、今後の村上春樹作品群の研究における要所であるといえよう。

「付記」作品本文の引用は『スプートニクの恋人』（講談社、一九九九年四月）に依った。

引用に際し、圏点、ルビは省略した。また引用文中の傍線は引用者によるものである。

注

- (1) 黒古一夫「コミットメント」の行方『村上春樹——「喪失」の物語から「転換」の物語へ』（勉誠出版、二〇〇七年十月）
- (2) 川村湊「村上春樹が他界と出会うとき」『村上春樹——テーマ・装置・キャラクター』（国文学解釈と鑑賞 別冊）（至文堂、二〇〇八年一月）
- (3) 大竹昭子「自己を遠望する意識 『スプートニクの恋人』村上春樹」『新潮』九六巻七号、一九九九年七月
- (4) 影山諒「〈物語〉のために——『スプートニクの恋人』における〈語り〉の構造をめぐる」『横浜国大言語教育研究』三六号、二〇一二年六月
- (5) 加藤典洋「行く者と行かれる者の連帯——村上春樹『スプートニクの恋人』」『小説の未来』朝日新聞社、二〇〇四年一月
- (6) 宇佐美毅「非現実的な現実——村上春樹作品の〈二つの世界〉をめぐる」『文学』（岩波書店）八巻一号、二〇〇七年一月
- (7) 徐忍宇「村上春樹『スプートニクの恋人』論」『日本文化學報』（韓國日本文化學會）第五一輯、二〇一一年十一月
- (8) 「『スプートニクの恋人』 現実の新しい様相」加藤典洋編著『イエローページ村上春樹 Page』（荒地出版社、二〇〇四年五月）

- (9) 「〈語る力〉への信賴——村上春樹『スプートニクの恋人』のために——」菊地靖彦教授追悼論集刊行会編『人・ことば・文学 菊地靖彦教授追悼論集』（鼎書房、二〇〇二年十一月）
- (10) 注6に同じ。